

No .

# The Truth

INSIDE story of Russia

Reina Umebayashi  
Maho Takuma  
Hiroko Toda

## Contents

### . はじめに

### . エリツィンとプーチン

---

1. プーチンの略歴
2. エリツィンからプーチンへ

### . 第一次チェチェン紛争

---

1. チェチェンの歴史
2. 第一次チェチェン紛争
3. 事例

### . 第二次チェチェン紛争

---

1. アパート連続爆破事件
2. 第二次チェチェン紛争
3. 事例
4. チェチェン紛争の一因
5. アレクサンドル・リトビネンコ
6. メディア操作

### . プーチン支持の理由

---

1. 強い指導者
2. 仕組まれた独裁

### . 終わりに

---

## ．はじめに

ロシア連邦が建国されて17年の年月が過ぎた。社会主義が崩壊して民主主義が成立したと言われるロシアだが、すぐ隣にある国なのに私たちはその現実を知らないでいることに疑問を持った。なぜ情報が入ってこないのか。ロシアは本当に民主化したのか。なぜ暗殺が起こっているのか。

今までロシアの情報に注目したことはなかった。それは、日本に流れるのは大きなニュース（例えば、エリツィンの死去・大統領選挙など）だけで細かい事象については大きく取り上げられることが少ないためである。しかし私たちは、日本でもニュースに取り上げられたリトビネンコ氏の事件をテーマにした本に出会った。この本では、リトビネンコ氏が元KGB・FSB時代に見てきたロシア政府の現状を自らの体験・考えと絡めながら、今まで明らかにされてこなかった真実が書かれている。

謎の死を遂げたリトビネンコ氏の事件は私たちの記憶にも新しい。この本をきっかけに現在のロシア政府の謎が深まっていった。現代の民主主義の社会において「暗殺」なんていうものが起こり得るのだろうか。元KGB出身であるプーチン現大統領が指示したのか。こうして考える中で、プーチン現大統領をめぐるロシアの現状は、私たちが考えているような民主化されたものでなく、それが形ばかりのもので社会主義の爪あとを深く残しているのではないだろうかという見解に至った。闇の中に生きるロシアが、なぜそこから抜け出せないのか、むしろ時代をさかのぼろうとしているこの国が示すものは何なのか、そして国家にとっての内幕の重要性とは...



## . エリツィンとプーチン

### 1. プーチンの略歴

	1952.10.7	レニングラードの貧しい労働者の家庭に生まれる。
	~	小中学時代は不良で、ピオネール（共産少年団）に入れなかった。
	1967	反ナチス映画に影響され、KGB のレニングラード支部に志願したが、出直すように諭された。
	1975	グレード法学部卒業。
	1975~91	<u>国家安全保安委員会（KGB）</u> に勤める。 第一総局（対外諜報部門）
	1980	モスクワの <u>アンドロポフ勲章大学</u> でスパイとしての本格的な訓練を受けた。 諜報部門のエリート養成学校
	1985~90	東独のドレスデンに定住。
	1989	ベルリンの壁崩壊時、東独国家保安省（シュタージ）が民衆に襲われる。
	1990~91	レニングラード大学学長補佐官
1991~92 第二のレニングラード包囲	1991	サンクトペテルブルク市議会議長アナトリー・サブチャクの顧問
	1991.6~96	サンクトペテルブルク市対外関係委員会議長
	1995.5	「われらの家ロシア」（NDR）のサンクトペテルブルク支部長
	1997.3.26	大統領府副長官兼監督局長官
	1998.5.25	大統領府第一副長官
	1998.7.25	連邦保安局（FSB）長官
1999.8 アパート連続爆破事件	1999.3.29	安全保障会議書記を兼任
9 第二次チェチェン戦争	1999	首相に任命される。
12 エリツィン大統領辞任		エリツィン大統領によって大統領代行に指名される。
2002 モスクワ劇場占拠事件	1999	大統領になる。
2004 ベスラン学校占拠事件	2004	大統領 2 度目の当選。

## 2. エリツィンからプーチンへ

1997年の3月にプーチンはクレムリン入りした。そして、大統領府の監督局長を務めていた時に初めてエリツィンと出会う。エリツィンのプーチンへの評価は高い。彼は自らの自伝の中で次のように語っている。「ほかの連中はロシアや世界に対する自分の考えを表に出したが、プーチンはそういう素振りを見せなかった。」

そして、当時連邦保安局（FSB）の長官であったコワリョフが、チェチェン戦争が激化する中でそれが現状に合った人事ではないと悟ったエリツィンは、彼に退職を命じ、プーチンを後任に据えた。エリツィンは「コワリョフの後継者はプーチンしかいない。」と語る。

エリツィンは言う。「プーチンは大きな政治問題にかかわろうとしなかった。その上、他のだれより素早く危険を察知し、私に警告してくれた。プーチンがサブチャークを海外に逃亡させる手伝いをしたことを聞いた時、わたしの思いは複雑だった。プーチンは大変なリスクを背負うことになるかと心配するとともに、素晴らしい行動をとったと称賛する気持ちがわたしの中に沸き起こったのだ。」

こうして、エリツィンの信頼を勝ち取ったプーチンは1999年に首相に任命される。この時点でプーチンを大統領に推すことも決めていたようだ。国内向けのテレビ演説で、彼はプーチンを2000年の大統領選の候補者とすることを正式に発表した。

## ．第一次チェチェン紛争

### 1. チェチェンの歴史

チェチェン人は紀元前から北カフカスに住み続けてきた先住民族である。ロシアからは山岳民と呼ばれ、インゲシ人やダゲスタン人とは同じカフカスの民族としての同朋意識が強い。北カフカスにおける最初の国家は、トルコ系遊牧民のハザール帝国で、7世紀から10世紀後半まで続いた。ハザール帝国滅亡後は、アラン国家が樹立され、北カフカス一体を支配したが、13世紀のタタール・モンゴルの侵入で滅びる。遊牧民たちの侵略が弱まるにつれてチェチェン人たちは自分たちの土地を取り戻し、北方の隣人ロシアと友好的な関係を打ち立てた。しかし、皇帝ボリス・ゴドノフの時代から、ロシアは徐々にカフカスを征服しようともくろみ始め、ピョートル1世時代の1712年、ロシアはカフカスを支配しようとして攻撃したが、チェチェン人など北カフカスの山岳民族とアゼルバイジャン人の反撃の前に完全に敗退したのである。しかし、ロシアはカフカス征服をあきらめなかったため、1730年代からカフカス侵攻のロシア軍と尾相田に間断なき戦争が始まったのだ。特にエカチェリーナ2世の次代にカフカス進出が強化された。カフカスに派遣されたロシアの名将軍スヴォーロフはチェチェンとダゲスタンで激しい抵抗を受けた。この時期の民族解放闘争を最初に統率したのがイスラム教ナクシバンジ教団のマンスール・ウトウルマである。

マンスールは 1758 年、ロシア艦隊をスンジャ川で破った。その後自らをイマーム（宗教的・政治的・最高指導者）と名乗り、山岳民に対ロシアの『聖戦』を呼びかけた。ところが 1791 年、マンスールは囚われの身となり、終身刑を宣言された後に死亡した。このマンスールの動きを封じ込めたことにより、ロシアは北カフカスの植民化を本格化させる。しかし、チェチェンの山岳河区民はロシアの支配に甘んじたことは一度もなく、そのあとも様々な名將の元で戦い抜いたのである。中でも未だにチェチェン人が語り継ぐ、シャミーリ将軍時代の独立戦争は特筆すべきである。1820 年代になると、共通の敵ロシアに対してチェチェン人と隣のダゲスタン人は団結し、シャミーリの元で戦った。1834 年、シャミーリはチェチェンとダゲスタンのイマームに選ばれ、ロシアの勢力が及ばない地域に回教法典国家『イママト』を建設した。この国家は領内をいくつかの行政区に分け、固有の管理、軍事、経済機構、そして国歌や国旗を持っていた。ロシア政府は、カフカスに独立国家が存在することを容認することは出来ず、シャミーリの率いるイママト国家とロシアとの間で 25 年に及ぶ泥沼の戦争が展開することになった。これを歴史上『カフカス戦争』と呼ぶ。1859 年にシャミーリが囚われたものの、なおチェチェン人たちは戦い続けたが、ロシアは弾圧をもってこれに応えた。この際に群衆が集まり、ロシア軍がこの群衆に対して発砲し死傷者 1200 人を出し、生存者はシベリア連行された。また、1865 年には 5000 人以上のチェチェン人世帯がトルコへ追放された。1917 年のロシア革命は、ロシア人とチェチェンの山岳民族との関係に何の変化も及ぼさず、むしろ対ロシアの民族解放闘争に火をつけただけである。ソビエト政権は、1920 年代に北カフカス一体でいくつもの自治州をつくっては壊し、何度も境界線を引き直し、人工的な改変を重ねていった。そして、1934 年にチェチェノ・イングーシ自治州を成立させ、1936 年には自治共和国に昇格させた。1923 年から 1925 年に赤軍は粛清を行い、イスラム教神秘主義教団を盗賊の巣窟だという名目で数千人の信者や活動家を射殺、あるいはシベリアへ流刑した。1944 年 2 月 23 日、チェチェン人とイングーシ人は、中央アジアとカザフスタンに民族丸ごと強制住され、自治共和国は廃止された。ロシアは、チェチェン人に、ナチス・ドイツに協力する恐れがあるという汚名を着せたのである。20 万人を列車に乗せて移送した強制移住は、たったの一日でなされた。駅へ連行するのが困難な病人、妊婦、老人たちはその場で射殺されたり、薬物を注射器で打ち込まれたり、焼かれるなどして病院の敷地にそのまま埋められた。スターリン批判によって、やっと強制移住先から人々は帰ることを許され 1957 年 1 月 9 日には自治共和国が再建された。故郷への帰還にあたって政府からは何の援助もなく、人々は自力で故郷を目指した。故郷に帰る家庭で、列車から降ろされ歩いていった人も多いという。その過酷な郷里への帰還の際、またしても大勢の老人や子供が犠牲になったのだ。正確な人数はわからないが、強制移住させられた人の半数がなくなった。1990 年 11 月 26 日、民衆の大会でチェチェンは独立を採択。翌日、チェチェノ・イングーシのソビエト最高会議は、集まった群衆の圧力に負けてこの独立宣言を受け取ったのである。そして 1991 年 9 月 6 日、独立派の全民族会議によってチェチェノ・イングーシ最高会議が廃止された。ピョートル 1

世の次代から 300 年近くロシアからの侵略と戦ってきたチェチェン人が初めて手にした『独立』である。チェチェン人は「我々は過去 300 年、ロシアと戦い続けているのだから」と話す。つまり、300 年戦争が今まさに進行しているというのだ。

## 2 . 第一次チェチェン紛争

1994 年から 1996 年にかけて、ロシア連邦からの独立を目指すチェチェン独立は武装勢力と、それを阻止しようとするロシアとの間で発生した紛争。

1991 年、ソ連崩壊の直前であるが、チェチェンでは元ソ連軍の将軍であるジョハル・ドゥダエフを大統領に選出。ソ連連邦離脱法を元に、一方的に独立を宣言した（厳密には、連邦離脱法はソ連構成共和国の離脱を念頭に置いたものであり、当時ロシア共和国内の共和国であったチェチェンには適応されない。）ロシアのエリツィン大統領はこれを認めず、1994 年にロシア連邦軍はチェチェンに侵攻する。ロシア連邦軍はその圧倒的な軍事力にも関わらず、チェチェン人ゲリラによる度重なる攻撃によって山岳地帯に支配が出来なかった。ロシア連邦軍が広域にわたって支配権を回復したことで、ロシア連邦大統領のボリス・エイツィンは 1995 年、一方的に休戦を宣言し、軍隊の撤退を始めた。

1996 年 5 月 27 日、エリツィンはチェチェンの抵抗運動のリーダーたちと初めて会見し、休戦を取り決めた。1997 年、ロシア軍は完全に撤退した。

この戦争で推定 10 万人の市民と、2 万人のロシア兵が死亡した。

## 3 . 事例

・グローズヌイ（チェチェン共和国の首都）市内の墓地には、身元不明の 900 体もの遺体が集められていた。それらは、人間というより、ゴミのようであった。衣服は身に着けてはいるが、半分は焼けただけ、体中がはちきれそうに膨れ上がっている。焼けて炭になっている遺体もあるが、人間の形をとどめている遺体は、それぞれが最期の苦しみの表情をはっきりと留めていた。細長い溝には（これが墓地）死体がどんどん投げ込まれ、ブルドーザーで土を被せている。ここに横たえられた遺体のほとんどは、無差別爆弾や戦闘で殺された一般市民であるが、両手を後ろ手に縛られたり、足を縛られた遺体がいくつもある。これは戦闘行為で殺されたものではなく、強制収容所（ラーゲリ）で殺された遺体である。

・カルピンスキー墓地での人骨の発見。ここはロシア人墓地であるが、溝には骨が折れていたり足を紐で縛られたり、ビニールテープで目隠しされている遺体もある。その隣から人骨が詰まった木箱が大量に見つかった。これらはまともに調査すれば WW 2 後まれに見る強制収容所における証す民族大量虐殺事件に発展する可能性さえある。チェチェン政府

とロシア政府が共同で調査すると合意したのだが、ロシア政府が調査に乗り出さず、未解決のままとなっている。

## ．第二次チェチェン紛争

### 1、 ロシア高層アパート連続爆破事件

ロシア高層アパート連続爆破事件は、1999年にモスクワなどロシア国内3都市で発生し、300人近い死者を出した爆弾テロである。チェチェン独立派武装勢力のテロとされ、同月に首相となったウラジーミル・プーチンはこれを理由にチェチェンへの侵攻を再開し、第二次チェチェン戦争の発端となった。プーチンの対チェチェン強硬路線は反チェチェンに傾いた国民の支持を集め、彼を大統領の座に押し上げた。

後述する「リャザン事件」等において、ロシア連邦保安庁(FSB)による関与の可能性を指摘する意見も存在する。

<事件の発生>

- ・ 8月31日 モスクワ中心部のショッピングモールで混雑時間帯に爆弾テロ。死者1名、負傷40名
- ・ 9月4日 ダゲスタン共和国のブイナフスクの軍人用集合住宅に乗り入れたトラックが爆発し、建物が崩壊。64人のロシア兵および家族が死亡、130人が負傷。
- ・ 9月9日 モスクワのグリヤノフ通りの集合住宅で爆破事件。死者94名、負傷者164名。
- ・ 9月13日 モスクワのカシールスカヤ街道沿いの集合住宅で爆破事件。死者94名、負傷者164名。
- ・ 9月16日 ロシア南部のヴォドルゴンスクの集合住宅で爆破事件。死者17名、負傷72名。
- ・ **9月22日 リャザリン市の集合住宅で大爆発**
- ・ 9月23日 ロシア軍、チェチェンの首都グロズヌイに対する無差別爆撃を開始。
- ・ 10月1日 ロシア軍地上部隊、チェチェン侵攻を開始。

### 9月22日 リャザリン市の集合住宅で大爆発

<概要>人口約52万人の地方中心都市の市内集合住宅地下で、ナンバー最後の2桁の部分に紙が貼ってある不審車に乗った男女3人を目撃した住民が、警察に通報。駆けつけた地元警察が、時限爆弾を発見する事件が起こった。

通報した住民によると、「不審者3人は間違いなくロシア人であり、チェチェン人ではない。



ナンバーに貼られていた紙には、リャザリンの地域番号の62番と書いてあったが、77番（モスクワの地域番号）が透けていた。」と証言している。

地元警察は非常線を張り、道路と鉄道を封鎖した。その後、「リャザリンから脱出できない」と、モスクワへ長距離電話をかけた男の会話を地元電話局のオペレーターが偶然耳にし、警察に通報した。警察が通話記録を調べたところ、通話先はFSBであったことが判明された。

その後FSBの長官は「リャザリンの一軒は爆破事件でも爆破未遂事件でもありません。「演習」でした。訓練のために仕掛けたダミー爆弾であり、火薬のようにみえた袋詰め白い粉は砂糖であった。あの手の演習をおこなっているのはリャザリンだけではありませんが、リャザリンの法執行機関と市民の皆さんには敬意を表したいですな。彼らの対応は的確であった。演習というのとはできるだけ実際に起こりえる形でおこなうべきだと私は信じています。さもなければ学ぶところはないし、役にもたたんでしょう。」などの言い訳を言った。

しかし、実際爆弾処理にあたった警察の専門家は「爆弾は間違いなく本物。」「信管と時限発火装置は軍用」「探知機は間違いなくRDX反応を確認」「2万ドルもする爆薬探知機は世界クラス。命にかかわることなので、専門家が日ごろから厳重に点検・テストしており、故障はありえない。」と証言した。

<リトビネンコの見解> 事件から丸一日経っているのに、FSBが何も発表せずにいるなどと言うことが考えられるであろうか。世界のメディアが未遂に終わったテロ事件を派手に取り上げていたというのに、プーチンがリャザリンで実施された「演習」について声明を発表しなかったことが、未遂に終わった爆破事件がFSBの仕業であったことを何よりも物語っている。

<林さんの見解> FSBがリャザリンで指揮した「演習」こそ、最も明白な事例である。これは、FSBの墮落であると思われる。

特殊機関はいまだに自分たちを「国家の中の国家」だと思い込んでいる。彼らのリーダーたちは、いかなる法にも縛られないと勘違いしているらしく、その行動はもっぱら政治的なご都合主義に基づいている。

<考察> リトビネンコの述べるように、アパート連続爆破事件に関して、世界中のメディアが大きく取り上げていたにもかかわらず、それがFSBの仕業であったと疑いがもたれた瞬間、「実は、国民を試すために行った演習であった」という声明文を出したことは、彼らの犯行であったという確かな証拠である。ここからもロシアの闇が垣間見られる。

## 2 . 第二次チェチェン紛争

ロシアからの独立を目指した第一次チェチェン紛争は 1996 年に一応の終結を見ていた。1997 年 5 月にはハサヴユルト協定が調印され、5 年間の停戦が合意されていた。ところが 1999 年 8 月、シャミル・バサエフに率いられた 1500 名程度のチェチェン人武装勢力が隣国ダゲスタン共和国へ侵攻し、一部の村を占領するという事件が発生する。又同時期にモスクワではアパートが爆破されるテロ事件が発生し、百数十名が死亡した。これを受けてロシア政府はチェチェンへの軍派遣を決定。9 月 23 日にはロシア政府が『テロリスト掃討』のため、再びチェチェンへの空爆を開始し、ハサヴユルト協定は完全に無効となった。これは現在でも進行されている。

## 3 . 事例

掃討作戦...掃討とは、完全に除き去ること。スル敵など平らげることの意。

チェチェンで掃討作戦は、大きなとがった鉄の針が外側に突き出ている車両通行止めのためのキャタピラ状のベルトを並べ始める。これが掃討作戦が近づいている合図である。

男たちは引きずり出され、自動小銃ノレン射音と砲弾の炸裂音がひっきりなしに鳴り響く。男たちはどこへ行くのか?強制収容所(ラーゲリ)である。ここでは、あらぬ疑いをかけられ拷問させられる。その拷問とは、まずおよそ深さ 6 メートル、3 メートル四方で薄暗い中にずっといなければならない。尋問が行われる際には、穴の中に縄が垂れ下がって、それを伝って出てくる。しかもこの中でチェチェン人は用を足さなければならず、又同じ土の上に終日立っていなければならない。精神的・肉体的拷問でなければ、電気拷問が行われる。片方の指にはむき出しの電線、もう片方の指先にはその電線の端がつながっていて、それを首の後ろを通してかける。

なぜこのようなことをするのか?それは身代金を集めさせるためである。生きた商品(人間)は価値があり、平均して 5 百ルーブルから 3~4 千ルーブルである。これは年齢によって異なるが、若ければ若いほど値段が高く、時には軍人たちがその場で外見を評価して決める。又、掃討作戦中も身代金を要求する。これは男性の場合『強制収容所』に連れて行かれないため、女性の場合『レイプされない』ためである。これらは女性より男性の値段のほうが高い。武装勢力になるであろう率が高いためである。

略奪行為...人、家畜、衣服、家具、装飾品、家財道具一式など、使えるものは全て持っていく。もっていけなさそうなものは、使えないようにする。例えば、食器なら割る。袋詰めされた小麦粉なら袋を切り裂き小麦粉を床にばら撒く。そして略奪したものの行き先は、シャリ、クルチャロイ、ツォツァン・ユルト、パチ・ユルト、ウルス・マルタン、グローズヌイ、そしてまたシャリ、クルチャロイ...という順に売られていく。しかしこれらは、お金のない人たちの話で、お金を持っている人たちは、軍人に 5 千から 6 千ルーブルのお金を差し出し、略奪されないようにする。

これらの行為は 1 回で終わるわけではなく、何度も何度も繰り返し行われることで、日常茶飯事化している。

では一体誰にとってこのチェチェン扮装は必要なのか。

遂行している全ての人に好都合なのである。契約志願兵は検問所で 10 ルーブルから 20 ルーブルの賄賂を四六時中手に入れる。モスクワ夜半からにいる將軍たちは予算に組まれた『戦争』資金を個人運用する。中間の将校たちは『一時的人質』や遺体の引渡しで身代金を稼ぐ。下っ端の将校たちは『掃討作戦』で略奪を行う。そして全員がそろって違法な石油や武器の取引に関わっている。

#### 4. チェチェン紛争の一因

上記で違法な石油の取引と述べたが、これがこのチェチェン紛争の起こった発端の 1 つにあげられるのではないのだろうか。

チェチェン自体から大量の石油が採掘されるのではないのだが、その隣にあるアゼルバイジャンの油田に原因がある。1994 年、アゼルバイジャンは、様々な企業と油田に関しての契約を結んだ。ロシアで契約を結べたのは、アゼルバイジャン人の社長を持つところだけだった。このことにあわてたのは、ロシアの資本家や進行成金たちで、バクー油田をはじめとするカスピ海の石油資源は、独立国家共同体共通の財産だと主張し始めた。

バクー油田から延びるパイプラインのルートが重要で、もしこのルートがグルジア経由となれば、みすみす利権を国際石油メジャーにさらわれる恐れがある。これを阻止し、ロシアやロシアの資本化が利権を手にするには、ロシア連邦領内を通すしかなく、そのルート上にあるのがチェチェンであり、石油の一部は西側諸国にも供給される。これにより、チェチェン紛争が激化しても、ベルルスコーニ（伊）、シラク（仏）、ブレア（英）、シュレーダー（独）はプーチンの擁護者となり、またブッシュ（米）もロシアを牽制しないのではないのだろうか。

#### バクー油田

バクー油田はアゼルバイジャン共和国にある油田で、商業的な石油の採掘は 1872 年に始まり、20 世紀初頭まで世界最大規模であった。1830 年代から 1930 年代の 100 年間世界の石油産出量の 90% を占めており、1901 年の時点では世界の石油産出量の半分をバクーが占めていた。しかし 20 世紀末になると陸上にある油田のほとんどが枯渇し、カスピ海の改定から掘削が行われるようになった。現在でも世界有数の石油産出地であり、バクーの経済も石油を中心として成り立っている。

図：石油生産

（単位：100 万トン/年）

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003
アゼルバイジャン	9.2	9.1	9.0	11.4	13.7	14.0	14.9	15.0	15.5

## ロシアの資源

しかし、上記でアゼルバイジャンの石油について述べましたが、資源大国といわれているロシアが果たして石油が出ないということなのか？

図：石油生産

(単位：100万トン/年)

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003
ロシア	307	301	306	303	305	327	346	380	421

上記のとおり、アゼルバイジャンよりはるかに石油生産量は上回っている。そしてロシアは、サウジアラビアに次ぐ世界2位の原油残存埋蔵量の国なのである。

ではなぜ、アゼルバイジャンの石油に固執するのか。

アゼリ＝チラグ＝グネシリ油田が1997年11月に始めて生産にこぎつけたのだが、当初使用したパイプラインは、バクーからカスピ海の西ぶちを北に隣接数ダゲスタン共和国の首都マハチカラまで北上し、西へ向きを変え、コーカサスの北麓を通りチェチェン共和国の首都グロズヌイをへて黒海のノボシースクにまで至る、いわゆる「北ルート」である。

しかし、1999年4月には、バクーから西方へコーカサスの谷あいを通り、グルジアの黒海沿岸にあるスプサ・ターミナルにまで至る、「西ルート」が建設され、アゼリ原油はロシア領を経由せず国際市場へアクセスすることが可能となった。これにより、北ルートはほとんど使われず、ロシアの税関を通らず輸出できるようになった。つまり、ロシアからすれば、お金を得る手段が1つ減ってしまったということなのではないのだろうか。

## 5. アレクサンドル・リトビネンコ

<チェチェン戦争の要因に関する リトビネンコの見解 >

第二次チェチェン戦争を始めたのはロシアである。その目的は、民主化へと進むロシアの歩みを、**独裁、軍国主義、排他的愛国主義**へと転じることであった。モスクワをはじめ国内各地の都市で、一連のいまわしいテロ事件を起こしたのも彼らである。テロは第一次および第二次チェチェン戦争へ突き進むための環境を整えようとした彼らの作戦の一環であったのである

当時ロシアは民主的で自由な精神あふれる発展期のさなかにあったのに、この戦争のせいで軍人の地位はあがり、影響力がたかまった。それに引き換え、平和とリベラルな価値観を支持する人たち、欧米よりの経済改革をすすめようとする人は押しのけられ、改革の取り組みは無意味になってしまった。この戦争はロシアを文明諸国の共同体から孤立させた。諸外国はこの戦争を支持も理解もしなかったのである。

その結果、一時は評判もよく人気のたかかった大統領（エリツィン）が、自国民だけではなく、国際社会からもそっぽを向かれることとなる。

いったんわなにはまった大統領は任期終了を待たずに辞任し、自分自身と家族の不逮捕特権と引き換えにFSBに権力を譲り渡すしかなかった。そして結局得をしたのは、エリツィンから権力を譲りうけたものたち。そして彼らが使った手段がチェチェン戦争である。

<要因1> チェチェンでの戦争はエリツィンを政治的に葬る絶好の機会となった。

ロシア指導部とチェチェン共和国大統領の間には金にまつわるつながりがあった。つまり、このロシア人たちはドゥダーエフ(チェチェン大統領)から継続的に金をまきあげていた。これが始まったのは、1992年チェチェン領内に置きさらえたソ連軍の武器を、チェチェン人が賄賂を払って買いとったときである。ドゥダーエフはコルジャコフ・バルスコフ・ソスコヴェツに数百万ドルの賄賂を送り武器を買い取った。

ところが1994年になるとこのシステムがうまく機能しなくなる。

モスクワが次第に膨大な金額を要求するようになり、ドゥダーエフがノーと言いはじめたのである。戦争の暗雲が立ち込めた。エリツィンとの交渉を要求したが、そのためにはまた賄賂が要求されたので拒否し、さらにそれまで金だけのために自分をたすけてくれていたものたちに揺さぶりをかけ、自分は役人たちが私腹を肥やしていたと暴露する文書をもって、それを公表すると脅した。しかし、彼の見込みはずれ、エリツィンとの会談は実現しなかった。

<要因2> ドゥダーエフはいまや排除すべき危険人物となったのである。 こうして冷酷で無意味な戦争が仕掛けられることとなった。

### リトビネンコについて

1962年、ポロネズ生まれ。80年、陸軍で12年の軍隊生活。88年、KGB 諜報部門に移り、91年からFSBのスタッフとして対テロリズムと組織犯罪対策専門家として働き、多くを旧ソ連の民族紛争頻発地域で過ごした。MUR(モスクワ犯罪捜査部)との合同捜査活動により、MUR ベスラン章を受ける。97年、FSBの最機密部門、犯罪組織分析部門第7課に、上級作戦仕官・副課長として配属。98年11月、モスクワで記者会見を開き、上層部を公然と批判。99年3月、縦造容疑でFSBに逮捕され、モスクワのレフォルトヴォ監獄に収容される。11月に証拠不十分で無罪となったが、即座に別の縦造容疑で逮捕。2000年、海外渡航禁止を条件に釈放。しかし、新たな3件目の犯罪が立件され、FSBと捜査当局が、家族を脅迫し始めたために、ロシアを出国。2001年に政治難民として認められ、家族(妻と子の3人家族)とともにイギリスで生活。2006年11月、放射性物質ポロに有無210によって暗殺された。愛称はサーシャと呼ばれる。

### サーシャの逃走劇

リトビネンコ中佐は記者会見を行い、FSBの数名の高官がベレゾフスキー暗殺を企てたと主張。テレビ番組で公然と情報機関にたてついたことがルビヤンカの本部には受け入れがたく、リトビネンコはほどなく数年前に被疑者に暴力をふるい、負傷させたという罪をでっちあげられ、リトビネンコは内務省に逮捕された。

リトビネンコに命を救われたボリス・ベレゾフスキーはアレックス(\*リトビネンコ暗殺

の著者)にリトビネンコの亡命を助けてあげてくれるように頼む。

アレックスはトルコまで飛んでアメリカ大使館に連れて行くつもりだということを、アメリカのクリントンの国家安全保障会議で働いている旧友に相談した。

.....・そして、一家とともにひとまずトルコに向かうことを決意。

トルコはロシアからの訪問者が唯一ビザなしで入ることの出来る国であった。しかし、トルコでもモスクワ警察はこの一週間彼を探し続けてた。

アレックスは弁護士のジョセフに連絡をとり、アメリカで保護を受ける方法を相談。

そして、「どういう形であれ、駆け引きが始まったら譲ってはいけない。まずはビザを手に入れること。そのあとはなんでも連中のほしがるものをくれてやればよい。」とアドバイスを受けた。

アレックスはリトビネンコ一家を伴い、アメリカ大使館に向かう。交渉は彼のいうとおりに進められた。

そして、アメリカに入り、ホテルに泊まっている時、やはり彼らを見張っている人がいることに気付き、レンタカーで脱走する。

.....・そして、イスタンブールに向かった。

アレックスは、サーシャが亡命を求めるには、どこかの国に入っていなければならない。しかし、サーシャのパスポートではビザはとれないことに気付く。

そこで西ヨーロッパの空港で乗り継ぎがくみこまれているモスクワ行きのチケットを購入することで、乗り継ぎの空港で彼は亡命を要求できると考えた。空港の乗り継ぎのエリアにいる限り、ビザは必要ないからだ。

(ここでサーシャの偽のパスポートがばれそうになるが、トルコは係わり合いになるのを恐れ、見逃してくれた。実に運がよかった。)

そして一向は、イギリスに向かう。

\*ここでのロシアの執念深さに注目してほしい。外国に逃げたとしても、どこからか情報を得、徹底的に追い求める姿勢はかなり強固なものであるといえる。このロシアの現状がある限り、ロシアからは反抗者はないであろう。むしろ、出ることが出来ない状況にあるのだ。

#### 事件の概要

2006年11月23日、元F S B (旧K G B) 中佐のアレクサンドル・リトビネンコ氏がロンドンで死亡。体内から放射性物質ポルニウム210が検出された。

リトビネンコ氏はブーチン大統領の政敵であった新興財閥のボリス・ベレゾフスキー氏に対するF S Bの暗殺計画を告発して2000年にイギリスに亡命した人物である。

リトビネンコ氏自身が上官からベレゾフスキー氏の暗殺を命じられた、と主張した。

また、チェチェン紛争は、プーチン政権の主張するような「対テロ戦争」ではなく、FSBによるテロ戦争そのものであると暴露する本を出版した。つまりFSB = 犯罪集団というストレートな本を出版した。国内で反対派封じに成功したプーチン政権にとっては、同氏はやっかいな人物であったといえる。

#### 殺された要因

殺された直接の契機は、プーチン政権に向けてリトビネンコが放った三本の矢である。

**第一の矢** 1999年のモスクワなどで起きたアパート連続爆破事件  
2002年、イギリスに亡命していたロシア連邦保安庁（FSB）の元職員アレクサンドル・リトビネンコは自著『Blowing Up Russia: Terror From Within』のなかで、「事件は、チェチェン独立派武装勢力のテロとされたが、実は第2次チェチェン侵攻の口実を得ようとしていたプーチンを権力の座に押し上げるためFSBが仕組んだ偽装テロだった」と証言した（その後、リトビネンコ氏は、2006年秋、亡命先のロンドンにて、謎の（放射能被爆による）中毒死を遂げた。）

**第二の矢** 2004年9月に南ロシアで起きた学校占拠事件  
北オセチア共和国で、ロシアの新学年初日である2004年9月1日に、多数の児童と保護者が集まった学校を武装勢力が占拠。ロシア軍のチェチェン共和国からの撤退を要求しましたが、交渉は行き詰まり、軍の制圧によって1000人以上の死傷者を出しました。犯人グループは予め現場に多数の武器と火薬を持ち込み、人質の家族が武器を持って現場に入り込むなど、混乱と凄惨を加速させる様々な要因があったことが指摘されています。

**第三の矢** アンナ・ポリトコフスカヤの死。  
リトビネンコはチェチェン戦争報道で、プーチン政権を批判していたアンナ・ポリトコフスカヤ記者の殺害について、次のように明確に語っている。  
「アンナを殺したのは、ロシア大統領ウラジミール・プーチンです。彼女と最初に会ったときには、彼女自身、自分が暗殺されるという可能性を口にしていました。  
ロシアはFSBによる厳格な体制下にいます。アンナのような立場のジャーナリストが、プーチン大統領本人の許可なく抹殺されることなど、まったくあり得ません。ですから、アンナはプーチンに殺された、それがロシアの知るべき真実です。」

11月1日 リトビネンコはアンナ記者の殺害に関与した人物のリストを受け取るために3名の人物と接触した。

一人目 FSB時代の知己で、ロンドン市内のホテルで会ったときに紅茶を飲んだという。  
二人目 このとき同席していたウラジミールと名乗る見知らぬ人物

3人目 旧ソ連の情報機関の活動を調査しているイタリア人のマリオ・スカラメッタ氏である。

3人と接触した直後にリトビネンコは体調を崩し、翌日2日に入院。17日容態が悪化し、集中治療室にいれられ、23日に死亡した。

11月イギリスのタイムズ紙は「動機・手段・機会のすべてはF S Bの関与を物語っている。」と指摘している。一連の事件に関して、プーチン大統領はロシア当局の関与を否定し、「死因に関する推測には根拠がない」とコメントしている。イギリス捜査当局は元K G B将校のルコボイ氏を容疑者として特定。

<見解>同氏の体内とホテルから検出されたポロニウム210を人工的につくるには、原子力施設などおおがかりな設備が必要とされる。権力の中枢に近い勢力でなければ製造や使用は禁止されるはずである。

#### リトビネンコの声明文

2006年11月24日 ロンドン 大学病院の外で、リトビネンコの**声明文**が記者たちに公開された。

多くの人々に感謝します。私のために手を尽くしてくれた医師、看護師、病院の職員に。プロ意識をもって精力的に私の事件を捜査し、私と家族の身の安全に配慮してくれたイギリスの警察に。

私を庇護してくれたイギリス政府にも感謝します。私はイギリス国民になったことを誇りに思う。また、私の窮状に関心を示し、励ましてくれたイギリス国民の皆さんにも感謝をささげます。常にそばにいてくれた妻のマリーナに感謝します。妻と息子に対する私の愛は尽きることがない。しかし、私はここに横たわり、死の天使の羽の音をはっきり聞いている。もしかしたら、うまく逃げおおせることも出来るかもしれないが、残念ながら私の足は、かくあれと思うほど早くはない。よって今こそ私のこの病に対して責任のある人物に一言。

あなたは私の口を封じることには成功したかもしれないが、相応の代償をはらうことになる。あなたは、あなたに対するもっとも厳しい批判どおりに、野蛮で冷酷な人間であることを自ら暴露した。人の命や自由、あるいはいかなる文化的な価値観もまったく尊重していないことを自ら示した。今の立場にはふさわしくないこと、教養ある人々からの信頼に値する人間ではないことをみずから証明した。あなたは確かに、一人の男の口を封じたかもしれない。だが、プーチン、全世界からの抗議の声が、これから一生あなたの耳の中でこだますることになる。これまであなたが、私に対してだけではなく、愛すべきロシアとその国民に対してしてきたことに、神の許しがありますように。



## 6. メディア操作

### 現状

「ジャーナリストのにとって最も危険な国」

第1位イラク、第2位アルジェリア、第3位ロシア（ジャーナリスト保護委員会より）

イラクやアルジェリアには戦争や紛争があり、混乱した情勢のために納得がいくが、ロシアでは違う。プーチンが大統領に就任してからというもの、ロシアでは戦場でなく平時にジャーナリストが暗殺されているのだ。そして、特にチェチェン絡みで殺されることが多い。また、メディアは政府から大きな圧力を受けている。具体的には、テレビや新聞の株を政府系企業が独占して経営を支配しており、メディアの人事にまで政府系の人物が介入しているという状態だ。

ここで一つ例を挙げたい。アパート連続爆破事件が起こると、プーチンはテレビで犯人はチェチェンのテロリストだと訴えた。しかし、その根拠はない。そして、政府の息のかかったテレビでは連日、爆破事件の悲惨な映像を繰り返し流した。これはロシア国民の憎悪と恐怖を駆り立て、世論の後押しを受ける形でロシアはチェチェンの首都グロズヌイへの空爆を開始した。

### 最近の動き

- ・2007年の東京新聞によると、ロシアでもっとも著名な独立系新聞であるノーヴァヤ・ガゼータでは「ポリトカフスカヤ報道部」では政権の闇を告発する記事が減ったかわりに、最近ラティニナ政治評論員が「チェチェンに秩序をもたらした」と評価するなど、政府を支持するようになっている。これは、レベジェフ氏が39%の株を取得したことが絡んでいると思われる。
- ・2008年1月ノーヴァヤ・ガゼータがレニングラード州で配布停止となった。
- ・NGO「言論保護財団」によると、ロシア国内で明らかになった権力機関による「検閲」は28件、記者の逮捕は75件だという。

### 考察

報道機関がほぼ全て政府系のものになることによって、国民の耳には政府を賞賛する情報しか届かなくなり、自然と自国の政府に忠実になってくる。これは日本も例外ではない。もちろん日本の場合は買収されているわけではないが、それでも、自然とほぼ全ての報道が右寄りだ。どの新聞を読んでも、テレビでどのチャンネルを回しても、私たちが得る情報はほとんど変わらない。そのせいか、私たちは政府を非難するよりはむしろ、心のどこかで信頼し当てにしている。同じようなことがロシアで起こっていると考えればよい。それも政府によって意図的に行われているのである。

情報を操作することによって、ロシア政府は嘘を嘘で隠し、それをまた隠す連鎖を続けているとしか思えない。しかしそこには、国民のために隠さなければならない事実があるのかもしれない。国民が知らない方がよいこともあるのかもしれない。チェチェン戦争は2度行われた。1度目のチェチェン戦争は2度目よりも大きな被害を出している。その違いを報道のあり方にみることも出来る。1度目の戦争ではほとんど報道を規制していなかったが、2度目の戦争ではプーチンによる残酷なまでの報道規制が行われており、それは今現在も続いている。

自国の戦争の仕方があまりにも一方的で、虐殺まで行われることを国民が知ったとしたら、ロシア国民は政府に付いていくだろうか。国内の混乱を避けるためにも情報操作は必要だ。また、外にチェチェンという敵を作ることによって一致団結していた国民の心が、バラバラになってしまったとしたら、その国をどう維持していけばよいのだろう。それは中国にとっての日本であり、日本にとっての北朝鮮だ。その度合いは様々だが、国民の心を一つにしておくために必要不可欠なものかもしれない。

そう考えると、政府のあり方として情報操作が間違っていると、一概に否定することは出来ないだろう。徹底的な情報操作は、国内の治安を守り混乱をさせないためにあるべきなのかもしれない。政府にいる人間は、つまり国を支えていく人間は、私たちのような民衆とは違ったレベルで何十年も先のことまでを見通して一番よい方法を取っているはずだ。

## ．プーチン支持の理由

### 1．強い指導者

#### プーチンの人物像

##### ・サブチャク

「勉強熱心な学生で、それを見込んだ私は、市長になってまず顧問に、最終的には第一副市長として登用した。ワーカホリック(仕事中毒)とも言える働きぶりで実績を上げ、彼には大幅の信頼を置いていた。」

「彼自身は自分について話すことを好まないようだが、決して閉鎖的な人間ではない。狩りや釣りに行けば、よく冗談を言う社交的な性格だ。」

##### ・「マヤーク通信」1月27日

「彼は愛国者であり、国益に奉仕する指導者になるであろう。改革経済、個人の権利保護を堅持する一方、それらをすべて国家の管理に置こうとするはずだ。国益保護のためなら誰をも恐れぬであろうが、外国との対立が国益にならないことは熟知しており、国際関係はむしろ改善されると思う。」

##### ・サンクトペテルブルク市第一副市長 ビャチェスラフ・シェルバコフ氏

「サブチャク氏は寝てばかりいたが、プーチン氏は一日十六時間は働いていた。几帳面

で謙虚、温厚な性格に加え、規律と礼儀を重んじ、部下や上司ら周囲の人を裏切ったことは一度もなかった。誰一人として敵はいなかった。」

・政治学者アレクサンドル・ツィプコ氏

「プーチン氏の目指す体制は元アルゼンチン大統領ペロン型の『国家資本主義』だ。私有制と市場の枠組みは守りながら、権威主義的な統治形態の下で、国家統制や国内産業の保護が重視される。この権威主義は「独裁」とまでは呼べないまでも、エリツィン時代以上のワンマン体制となることが予想される。プーチン氏は『家父長主義』の傾向が強く、(伝統的な)『民族の父』となる資質を持っている。」

・前ロシア連邦大統領ボリス・エリツィン

「大統領に報告にやってくる人物は一般に大統領の気を引こうとして自分の考えを披露し長話するものだが、プーチンの出す報告は簡潔で無駄話をしないので、もっと話したいとおもった。」

「この男は何にでも対応出来る。」

「デモクラシーと市場改革を強く心棒し、揺るぎなき愛国心を併せ持っている。」

また、プーチンが理想とする政治家はフランスのドゴールだという。また、プーチンはスポーツマンで、1973年に格闘技サンボのスポーツマスターの資格を習得し、1975年には柔道で黒帯を取っている。

ロシアは独裁政権で暗殺やテロが多いという事実は変わらないが、以上の証言から真面目で愛国心強いプーチン像がうかがえる。エリツィンに気に入られ、周囲からの信頼も厚く、出来る政治家と見られていることは確かだ。

## プーチン政権へ

一貫して60～70%の支持率を維持し続けるプーチン政権。有権者の多くは、無秩序と不安定な状況をいつまでも改善できないエリツィンに飽きていた。世論調査によると、「エリツィン時代はソ連時代より良くなった」と答える人が15%なのに対し、「悪くなった」と答える人は67%におよぶ。理由としては、失業の増加、チェチェン戦争、生活水準の低下などが挙げられる。そんな中、ロシアの人々は秩序と安定を保障してくれる毅然とした「強い指導者」を待ち望んでいた。それが、KGB出身のウラジミール・プーチンである。

わずか7か月で政治的にほとんど無名だった人物が突然政治の表舞台に登場し、ロシアの最高指導者にまで昇りつめた背後には大きな影がある。1999年の夏から年末にかけてのロシア内政の動きは、プーチン大統領実現のためのシナリオである。プーチンの人気は急上昇したのは、ロシア国内のチェチェンに対する憎しみが強まる中で、人道、人権上国際的な非難を浴びながらも、彼が断固としてチェチェン戦争を遂行したことが大きな要因と

なっている。もし、ロシア軍に大きな被害が出たとしたら、もしくは戦争に反対する空気が強まってきたとすれば、プーチンの人気が急落する恐れもあった。ゆえに、6月にエリツィンが任期を終えるまで待つことが出来なかったと思われる。

## プーチンの政策

プーチンの政策のヒントを提供したのがプーチン論文「ミレニアムの挟間のロシア」だ。

- ・「国家は腐敗と闘い、官僚機構を簡素化し、説明責任を強化しなければならない。司法部門は強化され、これまでより効果的に犯罪と闘う方策が講じられるべきである。」
- ・「自由市場は国家の規制によってバランスが取られねばならない。必要な場合には国家が介入すべきである。国家は計画経済制度への逆境なしに、社会的理由から経済の中で積極的な役割を果たさなければならない。」
- ・「経済改革を進めるが、国家管理は強化する。野放しのショック療法はとらない。」
- ・「国家による働きかけと市場メカニズムとを組み合わせた投資政策によって、外国投資家にとって魅力的な投資環境を作り出す。外国投資なしにロシアを発展させるのは難しい。」
- ・「ロシアのGDPの40%を占める闇経済を駆逐するために、法擁護機関の活動を改善するとともに、許認可制度、税制、外貨管理、輸出制度の分野での監督を強化する。」
- ・「税制改革、バーター取引の解消、文明化された市場の創設、銀行部門の改革を通じて効果的な金融制度を生み出さねばならない。国際的経済機関への統合推進も重要である。」

以上は要約だが、これらからプーチンがやろうとしていることが「強い大国としてのロシア」の復活であることがうかがえる。そして、それこそがロシア国民が待ち望んでいることなのだ。プーチン大統領は選挙綱領においても改めて「強いロシア」の実現を約束した。そして、プーチンは自身で述べた通りに、大きな政府を一層固め、経済も発展させている。

## 2. 仕組まれた独裁

ソ連の末期のゴルバチョフ政権下で、それまで限界に来ていたソ連型経済はついに破綻した。その後エリツィン政権になって、経済の立て直しを図ろうと、国営企業の民営化を急速に推し進めたが、あまりにも急にやってしまったため、経済の混乱、物価の高騰、生活水準の激悪化し、また大国であったという国民のプライドは傷つけられるという結果となった。また経済の建て直しを国際通貨基金の指導のもの行っていたのだが、失敗したことによって民主主義や西側諸国への不信感が生まれ、それと絡んで、民族主義が強まり、チェチェンをはじめとする少数民族への差別や偏見が高まりました。その混乱状態にあるときにチェチェンは独立宣言をしました。チェチェンはロシアに経済面で頼らなくても、自国に石油があるということから、経済の分野でロシアに頼らなくてもやっていけると踏んだ。しかしエリツィンは反対し、チェチェン独立を潰そうとし、第一次チェチェン紛争が

はじまりました。しかし、エリツィン率いるロシアは敗戦し、再びプライドを傷つけられました。そこに登場したのがエリツィンの後継者として現れたウラジーミル・プーチン氏でした。首相に就任した年に、「アパート連続爆破事件」が起こったのですが、この事件が起こると、プーチン氏はテレビに出演し、「犯人はわかっている。チェチェンのテロリストだ！」と発言。また、爆破事件現場の悲惨な映像を繰り返し流して人々の憎悪と恐怖をかきたて、さらにプーチン氏は「必ずテロリストを叩き潰す！便所の中に叩き込んでやる！」と発言。このことにより、国民からプーチン氏は「勇敢で強い最高の指導者」「失われかけた領土を回復した英雄」「ロシア国民に大国のプライドを取り戻させた指導者」と呼ばれるようになりました。上記にも記したように、メディアの操作が行われ、それによって英雄としての自分を演出し、さらに資源大国であるロシアは、石油（サウジアラビアに次ぐ世界2位残存埋蔵量）・天然ガス（世界1位の残存埋蔵量）による好景気により、エリツィン時代には出来なかった経済成長が絡み合っ、プーチンは指示されるようになったのではないのだろうか。

## ・終わりに

社会主義が崩壊して世界全体が民主主義化していく中で、ロシアも同じ路線をたどっているものだと我々は思い込んでいた。しかしそれは私たちの偏見でしかないのかもしれない。21世紀に突入したロシアでは、格差社会が激化し、権力を持っている者が不正行為を犯しても裁かれないという無政府状態となり、また民族差別が横行するといった民主主義とはかけ離れた現実がある。

ではロシア国民は自国が民主主義国家になることを本当に望んでいるのだろうか。私たちはそうは思わない。なぜなら、エリツィンが行った急激な民主化政策は、国民の生活の向上とはかけ離れ、むしろ生活水準を下げる結果へとつながっていった。ソ連時代を知るある一般女性が映画「暗殺・リトビネンコ事件」の中で次のように述べている。「ソ連時代は大変だったが、食料には困らなかった。今は食料を得ることすらままならない。」つまり、世論は過去へ戻ることを求めているのだろう。だからこそそれに伴う強い指導者の出現は自然な流れだったと言える。プーチンの出現は私たちが思い描いているほど危険なことではない。確かに現在でも暗殺や不正が絶えない。このことは私たちにとっては一見信じがたいことかもしれないが、他民族国家であるロシアを安定させ一つにまとめて更に繁栄していくための「希望」となっているのではないだろうか。

## 《参考文献》

- ・ アンナ・ポリトコフスカヤ著,三浦みどり訳,2004『チェチェンやめられない戦争』日本放送出版協会
- ・ アンナ・ポリトコフスカヤ著,鍛原多恵子訳,2005『プーチニズム：報道されないロシアの現実』日本放送出版協会
- ・ 林克明著,1997『カフカスの小さな国：チェチェン独立運動始末』小学館
- ・ 塩原俊彦著,2006『ロシア資源産業の「内部」』アジア経済研究所
- ・ タチアーナ・ポポーヴァ著,鈴木玲子,山内聡子共訳,2003『モスクワ劇場占拠事件：世界を恐怖で揺るがした4日間』小学館
- ・ マリーナ・リトビネンコ著,加賀山卓朗訳,2007『リトビネンコ暗殺/アレックス・ゴールドファーブ』早川書房
- ・ A・リトヴィネンコ、Y・フェリシチンスキー著,中澤孝之監訳,2007『ロシア 闇の戦争』
- ・ 寺谷ひろみ著,2007『暗殺国家ロシア』学習研究社
- ・ エレーヌ・ブラン著,森山隆訳,2006『KGB 帝国：ロシア・プーチン政権の闇』創元社
- ・ 中澤孝之著,2007『エリツィンからプーチンへ』東洋書店
- ・ 林克明著,2007『プーチン政権の闇：チェチェン戦争・独裁・要人暗殺』高文研
- ・ 下斗米伸夫,島田博編著,2002『現代ロシアを知るための55章』明石書店
- ・ ボリス・エリツィン著,中澤孝之訳,1994『エリツィンの手記：崩壊・対決の舞台裏』同朋舎出版
- ・ 『ロシアのエネルギーインフラの現状と問題点』ロシア東欧貿易会ロシア東欧経済研究所
- ・ 『石油大国ロシアの復活』日本貿易振興機構アジア経済研究所
- ・ 『ロシア月報 763号 - 771号』外務省欧亜局ロシア課監修

